彩の国 埼玉県
Saitama Cancer Center News

がんセンターだより

第 56 号
平成31年3月1日 発行
発 行
埼玉県立がんセンター
発行責任者
病 院 長
坂 本 裕 彦

基本理念 “唯借命”

私達は生命の尊厳と倫理を重んじ、先進の医療と博愛・奉仕の精神によって、がんで苦しむことのない世界をめざします。

目次

- 婦人科の紹介……1
- がんゲノム医療……2
- 9階西病棟紹介……3
- リレー・フォー・ライフ・ジャパン（RFLJ）2018 inさいたま参加報告／栄養部の紹介……4

埼玉県のマスコット コバトン

婦人科の紹介

婦人科副部長　足立 克之

婦人科副部長
足立　克之

●私達の目指すところ

当科では横田副院長含め、合計８名で患者さんの診療に当たらせて頂いています。対象疾患は子宮頸癌、子宮体癌、卵巣癌、卵管癌、腹膜癌などですが特に子宮頸癌、子宮体癌は症例数が多く全国有数の治療実績があります。

私達の目指すのは豊富な経験に裏打ちされた質の高い医療です。質の高い医療とは、客観的に見た治療成績（高い５年生存率や治療合併症の少なさ）に加え、患者さんご自身が納得し満足できる医療だと考えています。がんの診療では期待した結果が得られないこともあります。患者さんやご家族、医療スタッフが情報を共有し、ご本人が最善と思える医療を探ることが、がんという深刻な病をもちつつもより良い生活を続けていくのに必要なのだと思います。診療実績や経験をもとにまじめに患者さんに向き合うことを基本とし、手術だけや抗がん剤治療だけをするのではなく、最初からずっと患者さんと寄り添う医療を提供することを理想としています。

●新しい取り組み

新しい取り組みも施行あるいは施行準備を進めてきています。具体的な例としては、①米国の女優が自らのことを告白してメディアでも取り上げられている、遺伝性乳癌卵巣癌症候群の方に対する治療にも積極的に取り組んでいます。「予防的卵巣卵管切除術」の診療体制を整え、2019年には実施が予定されています。②また、子宮体癌では術後負担を軽減するために早期癌（臨床進行期　IA期）には腹腔鏡手術を導入しており、2019年からはロボット支援下手術も開始されます。③新規治験（新規薬剤の臨床研究）に参加することで保険承認前の薬剤を使用する機会を得たり、癌組織の遺伝子変異を詳細に調べて最適な薬剤を選定する「東大オンコパネル」（先進医療B）に参加して治療効果が期待しうる薬剤や治験に関する情報取得の機会が得られるようにしています。

●研究について

当科では基礎研究や新規治療薬の治験だけではなく、国立がんセンターが中心となる多施設共同の研究組織であるJCOG（日本臨床腫瘍研究グループ）やJGOG（婦人科悪性腫瘍研究機構）などに積極的に参加し、新規手術・放射線治療などの臨床試験にも取り組んでいます。私達の病院は専門性の高いがん診療を多く行う診療拠点病院としてその使命と責任を全うし、日々の患者さんへの貢献だけではなく、未来の患者さんへの貢献をしたいと考えています。

●終わりに

新しいものばかりを追いかけると大事なものを見失います。一方で古い考えばかりでは患者さんに不利益になることもあるでしょう。私達は国内外から常に新しい知識・技術を取り入れ日々の研鑽をしながら、“病気ではなく患者さんを診る医療”を提供できればと思っています。

がんゲノム医療

腫瘍診断・予防科科長兼部長　赤木 究

腫瘍診断・予防科
科長兼部長
赤木　究

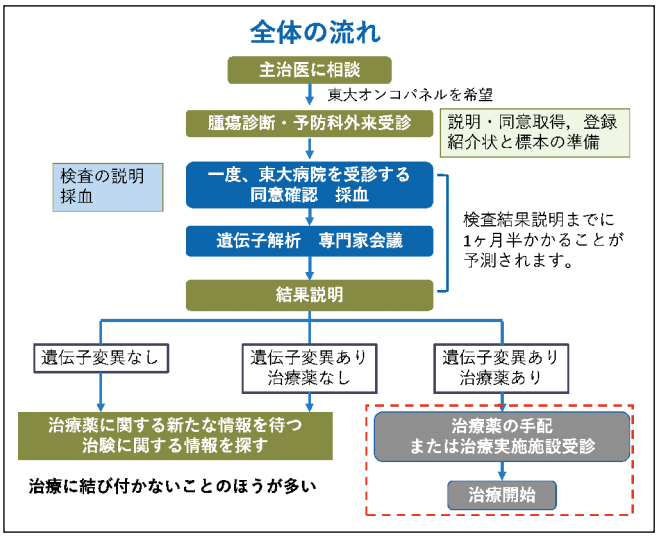
私たちのからだは、数十兆個の細胞から構成されています。それらの細胞は、お互いに協調して成長や健康維持のために働いています。そのかじ取りをしているのが、細胞の中にある遺伝情報です。その遺伝情報（DNA）に変化がおこり（書き変えられてしまい）、それが蓄積することによって細胞の性質が変わってしまうことがあります。がんは、このように遺伝子が書き変えられることで、細胞の性質を変え、発症する病気です。がん細胞は、無秩序に増殖したり、周囲に浸潤したり、遠くの臓器に転移したりしますが、こうした性質は、まさに遺伝子が変化したことによりもたらされるものです。そのため、がん細胞の中で起こった遺伝子の変化を調べることは、がん細胞の性質を知る重要な手がかりになります。その情報をもとに、一部の抗がん剤では、その治療効果を予測することができるようになりました。私たちは約２万種類の遺伝子を持っていますが、その中でもがんに関係する遺伝子が数百個存在します。近年、それらを一度に解析する技術が開発され、検査費用も次第に下がってきました。といっても、まだ数十万円かかりますが。これらの技術が医療へと応用されるようになり、多くの遺伝子に対して変化が起きていないかを調べることができるようになりました。遺伝子変化が起きていた場合、それに対応する、治療効果が見込める薬はないかを探します。今年は、こうした遺伝子検査（オンコパネル検査）が保険診療として利用できるように、国の方でも準備を進めており、今年は「がんゲノム医療元年」と呼ばれています。まだまだ、対象となる患者さんも限定されていますし、検査を行っても効果が見込める薬が見つかる確率は高くありませんが、今後多くの方がこうした検査を利用し、その情報が蓄積することで、治療に対する的確な判断ができたり、新しい治療薬の開発が加速されたりすることが期待されます。埼玉県立がんセンターでは、がんゲノム中核拠点病院である東大病院と連携して、約460遺伝子を調べる「東大オンコパネル」を先進医療として、提供しております。また、当センター内においても、最新の遺伝子解析技術を用いて患者さんに最もあった治療法の選択、抗がん剤の副作用の予測、がん体質の予測など、一人ひとりの患者さんに合った個別化医療（最近では「プレシジョン メディシン（精密医療）」などとも呼ばれることがあります）を提供できるように体制整備を進めております。

がん遺伝子パネル検査を受けるための条件

1. **がんであることが病理診断されている（血液腫瘍は除く）**
2. **手術できないがんや再発したがんで、すでに抗がん剤や放射線（標準治療）で何種類かの治療を行っている方やすべての治療が終わってしまった方**
3. **歩行可能で日常生活に支障がない（Performance Statusが０又は１）**
4. **手術や生検で採取したがんの組織が保管してある**

＊タイミングが遅くならないように、早めに情報を集めましょう

標準治療：病院で行われる治療法はすべて各がんの治療ガイドラインに則った方法で病気を判断し、治療法が選ばれています。
この治療ガイドラインに載っている治療法が標準治療です。



9階西病棟　師長
佐藤　憲子

9階西病棟　師長　佐藤 憲子

9階西病棟は、整形外科、血液内科、呼吸器内科、放射線科、4科の混合病棟です。今回は、4科の中で特に病床数の多い、整形外科と血液内科を紹介致します。整形外科は、主に手術を受ける患者さんが多く、悪性腫瘍の場合は化学療法・放射線療法を行っています。血液内科は、悪性リンパ腫、多発性骨髄腫の化学療法や放射線療法、移植を受けた患者さんの退院支援を行っています。

整形外科では、対象となる患者さんの年齢層は幅広く、10歳代から80歳代までの患者さんがいらっしゃいます。画像検査だけでは良性・悪性と診断できないため正確な診断ができるよう、針生検や全身麻酔下での切開生検を行っています。その結果、悪性腫瘍と診断された場合は、機能障害が大きく出ることもあり、退院後の生活にも支障をきたすことがあります。そういった患者さんが安全に今までと変わらない生活に戻れるよう、理学療法士やソーシャルワーカー等、多職種が一つのチームとなって意見交換を行い、患者さんやそのご家族の意向を確認しながら、連携して退院支援を行っています。若年者に発生する骨の悪性腫瘍の代表である骨肉腫の患者さんは、治療が長期となることが多く、学童期の場合、学校と治療の両立ができるよう医師、看護師をはじめ、ソーシャルワーカーや学校の先生らと連携しながら対応しています。

血液内科は、ここ数年で化学療法の新薬が多く開発されました。そのため、安全に薬剤が投与できるよう日々病棟スタッフ内で勉強会を開き、知識を深めています。また、化学療法を受ける患者さんの中には、骨髄抑制という副作用が出現する方もいらっしゃいますが、血液疾患を持つ患者さんの場合には、この骨髄抑制が強く出現することがあります。そのため、副作用対策として、手洗い・うがい、食事内容の工夫などの予防が必要となります。この予防が確実にできるよう、日々患者さんと関わらせていただいています。そして、治療や予防による制限がある中で、その人らしく日常生活が送れるよう支援しています。また骨髄バンクドナーの受け入れも行っており、骨髄採取は二泊三日での帰宅が可能です。

9階西病棟は、前述したように手術療法・化学療法・放射線療法を行っていますが、緩和ケアを必要とする患者さんもいらっしゃいます。患者さん個々の状態に応じて、患者さんやそのご家族が不安なく安心して治療が受けられ、療養できるよう看護を行っています。今後も安全な治療、より良い看護が提供できるよう、病棟スタッフ一丸となって一層努力してまいります。

リレー・フォー・ライフ・ジャパン(RFLJ)2018 in さいたま参加報告

―今年こそあなたも参加しませんか?―

病院内各所に掲示したポスターでも紹介していますが、10回目を迎えたRFLJさいたま2018(24時間リレーウオークは９月８日(土)～９月９日(日))に、埼玉県立がんセンターは参加いたしましたので報告をいたします。

がんセンターでは６月26日の院内キックオフミーティング以降職員／患者／ご家族の皆様に対し、募金／ルミナリエバッグの作成／チャリティグッズ販売／（リレーウオーク当日のイベントに来場できない方のための)手形作成など、を通じた広報とチャリティ活動を継続して参りました。結果として当日までに、メッセージや絵に想いを込めたルミナリエバッグ97枚（チャリティ20,000円)・手形120枚に加え、募金（グッズ販売・募金箱・当日参加した職員90名分の参加費合計）217,184円を寄付する事ができました。御協力頂いた皆様に御礼申し上げます。

ルミナリエバッグは夜間繰り返し降った雨にも負けず朝まで灯をともし続け、手形はワンハートフラッグとして来場者の手形フラッグと共に会場内外のがんサバイバーの想いをつないで会場を行進しました。また今年も坂本病院長と川村血液内科医長が講演してくださった他、医師によるバンド演奏、認定看護師を中心とした様々な啓発相談活動も行い、これまでの継続が評価されて坂本病院長はグッドサポーター賞、がんセンターチームはチーム表彰を受けました。イベント全体として例年を上回るチーム参加個人参加のあった中で、チーム参加したがんセンタースタッフのみならず、会場内外で参加された患者様ご家族にとっても支援となるようなイベントであったとすれば幸いです。

RFLは経過の良いサバイバーの方だけではなく、様々な形で今がんと生きているサバイバーとそのご家族や支援者のためのイベントです。2019年も９月に開催しますので、一人でも多くの皆様と会場でお目にかかれるのを楽しみにしております。

栄養部の紹介

栄養部　前川 森實

栄養部は「高度先進がん医療を支える食」「患者さんと家族に優しい病院」「災害対策の強化」を目標に入院中のお食事を提供しています。治療を完遂できるよう、嗜好や症状に合わせたお食事の提供の他、栄養状態の改善を目的に栄養サポートチーム（NST）活動も行っています。

また、ご自宅で療養するにあたりお食事や栄養の取り方について栄養相談も行っています。お食事でお困りのことがある方は主治医に栄養相談の希望をお伝えください（栄養相談は予約制です)。